



TITLE:

<図書紹介>The Mrabri, Studies in the Field
(The Journal of the Siam Society, Vol.L1
Pt.2), Bangkok, 1963,68p.(=pp.133-201) with
lists and photos

AUTHOR(S):

三谷, 恭之

CITATION:

三谷, 恭之. <図書紹介>The Mrabri, Studies in the Field (The Journal of the Siam Society, Vol.L1 Pt.2), Bangkok, 1963,68p.(=pp.133-201) with lists and photos. 東南アジア研究 1965, 3(2): 146-147

ISSUE DATE:

1965-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55061>

RIGHT:

からみてもまぎれもなく行政学の分野に属するものである。しかし、同時にタイの政治的文化に関する研究であり、かかる視点からみてもきわめてすぐれた業績である。
(福島徳寿郎)

Joseph B. Kingsbury and Robert F. Wilcox: *Introduction to the Principles of Public Administration in Thailand*. Institute of Public Administration, Thammasat University, Bangkok, 1961. 122pp.

タイ国政治の研究者として著名なウィルソン教授は、タイの政治を理解するためにもっとも基本的なことは、この国の統治構造における行政機構の地位と役割を正しく認識することであり、それは事実上「権力問題」に先行する重要な問題である、と指摘している。事実、タイの官僚機構は、伝統的に、権力斗争に対してはつねに中立性を保ちながら、しかも機能的な独立性と組織的な統一性を維持してきており、政治指導者のひんばんな交替にもかかわらず行政の一貫性が確保されてきたのは、官僚機構のこのような特性と役割に負うところが大きい、ということはいさしは指摘されているところである。かかる重要性にもかかわらず、タイ国行政に関する文献は、若干のモノグラフィーを除いて、わが国にはあまり紹介されていないように思われる。

本書は、表題からも判るように、タマサート大学行政研究所に客員教授として招聘された二人の行政学者が、テキスト用にまとめたまったくの入門書である。従って、本書に、各論点についての詳細な叙述分析を期待することはできないが、しかし一応行政の全側面が要領よくまとめられており、タイ国行政の全貌を把握するためには便利な概論書であるといえよう。122ページの薄い本ではあるが、二段組みになっているので、ページ数のわりには取り扱われている問題は多岐にわたっている。

本書は15章に細分化されているが、大別すれば四つの部分——行政および行政学に関する総論的叙述(第1～2章)、タイ国行政発展の略史(第3章)、各論的諸問題の分析(第4～14章)、およびタイ国行政の評価(第15章)から構成されている。各論的部分においては、行政の組織、管理、人事行政、財務行政、行政に対するコントロール、行政責任の問題が扱われてい

る。全体として、行政学の最近の理論的成果を集約しながら、それに照らしてタイ国行政の特質と問題点を明らかにするという叙述形式がとられている。

著者達がタイ国行政のもっとも重大な欠陥として強調している問題は、行政の政治的、道徳的な無責任性と非能率性である。政治的無責任性の克服のためには、政党の育成と自由な選挙の実施なかつく利益集団その他の自発的な市民組織の発展の必要性を指摘し、道徳的無責任すなわち腐敗の克服のためにもっとも基本的なことは、タイ官僚の行動様式にみられる伝統的な「人への忠誠」を克服して職務そのものに対する忠誠心を培うことである、としている。またタイ国行政にみられる非能率性の原因としては、組織上の欠陥とくに行政諸機関の無計画的な肥大増殖、過度の中央集権化、権限の分配にみられる諸欠陥、行政政策にみられる計画性の欠如、形式主義と法規万能主義をあげている。

はじめに述べたように、本書はまったくの入門書である。しかし、わが国ではタイ国行政の研究にはまだ全然手がつけられていないのが実情であるので、今後の研究のための手掛りの一つとして紹介することにした。
(福島徳寿郎)

The Mrabri: Studies in the Field (The Journal of the Siam Society, Vol. LI Pt. 2). Bangkok, 1963. 68p. (= pp. 133-201) with lists and photos.

Mrabri は一般に“Phi Tong Luang”の名でよく知られたタイ国北部の放浪民で、その primitive な生活のため色々な関心が抱かれながら、少数であることと elusive な放浪のために接近が容易でなく詳しい実態はよく知られていない。The Siam Society Research Centre では1962年8月の第1回調査に次いで1963年1月末に再び Kraisri Nimmanahaeminda 氏をヘッドに第2回目の Mrabri 調査を Amphur Na Noi (C. Nan) の山中で行なった。本書は、JSS の1号をこの第2回調査の報告に特集号として割当てたものである。

内容は5篇の論文からなっている。すなわち、(1) J. J. Boeles 氏の、この調査のあらましと material culture を主とした文化人類学的な報告、(2)西独 Bonn から参加した Dr. G. Flatz の形質人類学的報告、

(3) Kraisri 氏による, Mrabri 語および近隣のモン・クメル系諸言語の対照語彙表と, かつて Bernatzik が発表した Yumbri の語彙と Mrabri との対照表, (4) C. Velder 氏の, Mrabri camp のはじめての記述, および (5) W. Smalley による前記語彙表の言語学的な注釈ノート, の5篇である。

この調査ではとくに Kraisri の言語調査に重点がおかれたようであり, 実際, 本書の対照語彙表も, Mrabri 語のみならず他の北タイのモン・クメル諸語(カー諸語, ラワ語, モン語など)がほとんどこれまで未発表のものであるから, Mrabri に限らずこの系統の言語に関心をもつものにはまことに有難い資料である。残念ながら, (本書全体がそうであるが) どちらかといえば一般向きに書かれているため, たとえば, Smalley の注釈にもある通り音表記の方法が余りに粗雑であり, おそらく著者たちの意図以上にはとうてい利用できないであろう。Boeles 氏はいくつかの今後の課題として, Mrabri 語と他のモン・クメル諸語との比較および Mrabri 語の音韻論の研究をあげているが, 実際には比較言語的研究に先だってまずその言語の音素体系が明らかにされなければならないのである。

文化にしても, 専ら material culture について述べられていて social structure や他の民族との接触の問題は残された課題とされているが, この調査自体が著者のいうように pilot project なのであって, 対象が対象だけに有益でもあり読み物としても結構面白い書物となっている。(三谷恭之)

S. Takdir Alisjahbana: *The Failure of Modern Linguistics in the Face of Linguistic Problems of the Twentieth Century*. Kuala Lumpur, University of Malaya, 1965. 36p.

本書は, 著者が1964年12月22日にマラヤ大学で行った inaugural lecture であって, 当センターから同大学に留学していた前田成文氏からわたくしに読むことをすすめられたものである。

内容は, アジア・アフリカ地域の若々しいエネルギーを感じさせるもので, 極端なまでの言語学の現状批判と, この地域の国々が直面している現実の言語問題を解決するための新しい言語学創設の提唱である。

著者は, アメリカの構造言語学にしるヨーロッパの glossematics にしる, 現代の言語学は現実社会から遊離した実質的意味の乏しい学問になっていると強く非難している。音韻という言語の外面に専ら関心を集中したり, esoteric なまでの形式主義に陥っている, といい, とくに, 言語がそれ自体で安定した記号の体系であって言語学はそれを記述する学問だという根本前提がそもそもの誤りだという。なぜなら, 現実の困難な問題は言語の変革にあるのだから, というのである。

A A諸国が現在まじめにとりくんでいる nation building と modernization の問題のひとつとして, 各国とも言語の standardization と modernization の問題がある。安定した national language をいかに形成していくか, 近代社会にマッチした思考とコミュニケーションのためにいかに言語を合理化するか, 次々に入ってくる新しい概念に対する語彙の問題をどう処理するか, こういった language engineering こそが必要なのだ, というのが著者の主張である。本書の後半では, マレー語とインドネシア語について具体的な問題をひとつの例として簡単に説明している。

現代言語学がしばしば形式的・表面的であることはこれまでもむしろ伝統的な言語学者から批判されてきたし, 現実の問題解決に対する意欲にけることも確かであって, この点は何よりもまず強く反省されてしかるべきであろう。しかし, 著者が現代の言語学の範囲を狭くみすぎているということは別としても, この書の提起する問題はあまりに大きすぎる。第一にそれがもはや学問論の問題に関連していること, 次にこのような問題解決に果たして構造言語学の考え方自体が本質的に無効なのかどうかということ, また現実の問題といっても著者の立場とは別にわれわれにはまずそれが外国語の問題であるということ, こういった点で著者の主張がすべての言語学者たちを納得させるか, どうであろう。(三谷恭之)

Hydrologic Data (Thailand): National Energy Authority, Ministry of National Development, Thailand, 1965.

タイ国の全般に渡っての水文資料の年報であり, その内容は流量記録, 浮遊流下土砂量, 日降雨量, 日蒸発量, 風速におよんでいる。